

「施設」で暮らすということ

——入所者体験を通してよみとく「施設生活」の本質——

社会学部4年 大西翔平

「世のすべての中で最も怖いものは己れ自身である。それ以外の何ものでもない。あらゆる真実も愚劣も、己れにおいて結局は決定されるのだ。」

(岡本太郎『原色の呪文』の引用から)¹⁾

「人間はどんなことにでも慣れられる存在だ。わたしはこれが人間のもっとも適切な定義だと思う。」

(ドストエフスキー『死の家の記録』の引用から)²⁾

[目次]

- | | |
|----------------|-------------------------|
| I. 問題の所在と本稿の目的 | III. 「わたし」をよみとく—隠れた障害観— |
| II. 調査概要 | IV. 「施設」をよみとく—構造からの視点— |
| | V. 結語 |

I. 問題の所在と本稿の目的

今日の社会福祉は「地域福祉の時代」だといわれるなど、地域福祉が主流化してきていることが指摘されている³⁾。こうした情勢のなかで、入所施設の評価は極めて低いものとなっている。欧米では1970年代以降、積極的な脱施設化政策がとられ、知的障害者の入所施設はほぼなくなってきている⁴⁾。日本においては、2006年度より施行されている障害者自立支援法において、入所施設から地域のグループホームなどに生活の場を移すような、「地域生活移行」に力点が置かれ、各自治体の障害福祉計画では知的障害者の入所施設

から地域生活への移行を進めることを明記し、2006年～2011年までの6年間に、全国で1割以上の「地域生活移行」と、施設入所者数の7%以上を削減するという目標が定められている。その成果は2005年10月時点での知的障害者入所施設の利用者数は139,009人で、2007年10月時点では138,620人と定員減に関しては、ほとんど横ばいの状態であった。この2年間に18,945人が退所しているが、ほぼ同数の18,556人が新規入所しているためである。この施設退所者のうち地域生活に移行した人は9,344人とのことだが、その内訳は自宅3,642人(39.5%)、共同生活介護2,270人(24.3%)、共同生活援助1,661人(17.8%)となっており、約4割もの人が「自宅」を選択して親元に戻っているという状況であって、実際のところ十分な成果がでているとはいえない⁵⁾。とりわけ注目すべき点は、地域生活移行による退所者と同数程度の新規入所者が存在し、潜在的な施設入所待機者が多く存在しているということである。つまり本人にとって、また保護者にとって入所施設は忌避されるどころか、知的障害者の入所施設で生活している利用者の家族の中には、今もなお生活の場として求められているのである。例えば知的障害者施設家族会連合会のような「地域生活移行」政策に異議を唱える全国組織も存在している⁶⁾。

さて、こうした状況をふまえると、「入所施設は一体誰にとって問題とされているのか？」という疑問がわいてくる。たしかに身体障害者の当事者からの施設批判はよく耳にするが、知的障害者本人による同様な指摘はほとんどないとすると、知的障害者本人にとって入所施設とはどのようなものだろうか。一般に入所施設のイメージとしては、単調な生活、規則が多い生活、閉鎖的な生活などがあげられる。入所施設の生活といわれてプラスのイメージを持つ人は少ないのではないだろうか。しかし、そもそもそのような一般的な施設のイメージとは「誰」が、「どのように」してつくりあげ、「定義」したものなのだろうか。

そこで、本稿では大阪府の北部にある知的障害者の入所施設の協力のもと、筆者自身が入所者として施設での生活を体験することで、入所施設の機能をもう一度見つめなおし、施設での生活を入所者の側からよみといていくこと

を試みる。

Ⅱ. 調査概要

1. 調査方法

今回の調査では2010年9月6日～16日の期間で、「入所者体験」という名目で知的障害者入所施設に10泊11日間泊り込んだ。そこでの筆者の体験をもとに、施設で暮らすことの意味や、施設という制度であるが、居住の場としての施設の社会的な意味を検討することを目的とした。また入所者体験後の10月14日～15日にかけて、男性フロアの職員6名に一对一で、各1時間程度の聞き取り調査を行い、さまざまな角度から私の入所者体験を振り返った。聞き取りの方法としてはインフォーマル・インタビューを用いている⁷⁾。本稿には【聞き取り抜粋】として、その際の職員の語りを載せている。また、各インフォーマント⁸⁾の氏名については筆者による仮名を用いている。調査方法のまとめかたは、必ずしも確定的な調査方法が確立しているわけではないが、「桜井・山田編(2002)」ほかの研究業績によるフィールドワークの手法を参考としてまとめた⁹⁾。

2. 施設の概要と調査内容

今回の調査対象とした入所施設は、平成18年に開設され、障害者自立支援法に基づいて運営されている障害者支援施設である。事業体系は生活介護、施設入所支援、短期入所、日中一時支援、共同生活介護を行っている。グループホームやケアホームなどへの地域移行を積極的に行い、障害者に対する理解を深めてもらおうと地域住民との交流を続けている。施設の特徴としては、全室個室で男女共に20部屋完備しており、居住エリアは少人数で日常生活が送れるようにユニットケア方式を採用している。現在の男性利用者の定員は13名で自閉症の方が多く、平均年齢が37歳と比較的若い。日中活動は利用者がどのような力を持っているか個々の状況に応じた支援を提供してお

り、主に自動車部品の包装、陶芸作業やリハビリ活動などを実施している。他にも外出プログラムを取り入れ、多くの経験を積んでもらう取り組みも行っている。筆者の体験した11日間の、体験内容とスケジュールは次のようになる。

<表1>10泊11日間の体験内容と1日のスケジュール

	午前	午後	1日のスケジュール	
			時間	内容
1日目	オリエンテーション	作業	7:00	起床時間
2日目	ハイキング外出	夕食外出	7:15	朝食 フリータイム
3日目	作業	陶芸作業	9:15	ラジオ体操・歩行(20分)
4日目	作業	作業	10:00	作業
5日目	作業	陶芸作業	11:45	昼食
6日目	休暇	散髪・喫茶外出	13:00	作業
7日目	休暇	休暇	16:15	歩行(15分)
8日目	他施設体験①	陶芸作業	17:15	夕食
9日目	他施設体験②	他施設体験②	18:00	入浴
10日目	実習体験	実習体験	19:30	おやつ お茶タイム
11日目	作業	昼食・納品外出	21:00	就寝

表1の体験内容は施設の職員との事前の打ち合わせで施設側に決めてもらった。外出プログラムが4回設けられているが、これは特別なもので普段の利用者の日課における約1カ月分に相当する。土曜日、日曜日は利用者の日中活動の作業等は休みなので、「休暇」と表現している。他施設体験①、②は近隣にある同じ法人の施設に入所者体験の延長で体験し、実習体験は午前11時～午後8時の間に行い、入所者としてではなく「実習生」として体験した。1日のスケジュールに関しては日によって多少のずれはあるが、施設についての主な生活の流れである。

Ⅲ. 「わたし」をよみとく—隠れた障害観—

1. 入所者としての位置取りの変容

(1) 「なりきろう」とする自分から「ありのまま」の自分へ

入所者体験が始まったときは、利用者になりきろうと過剰に意識する私があった。私自身は初めての入所者体験に、職員は入所者体験として健常者を実習に迎えることに、それぞれが共にとまどいを抱えていた。その際に、主に生活フロアで勤務していた職員の語りでは、次のようなものがあった。

【聞き取り抜粋(1)：Nさん・Uさん】

Nさん：「大西君の中のイメージの利用者を装っている感じがしたな。なんか利用者のイメージを作り上げているんやろなど。でも、しっかりと利用者になりきろうという雰囲気もでてたけどな。」

Uさん：「職員と利用者の間みたいなのがしたな。大西君にとっての利用者の理想像を形づくってるんやろうと思ったね。もっと自由にしたらええのという印象もあったかな。」

当初、私は福祉サービスという枠組みの中での「利用者」になりきろうとしていた。すると、社会福祉の専門教育を受け、社会福祉士の実習も経験している私は、福祉サービス、施設支援という枠組みを参照項として自分を位置づけようとしてしまい、例えば、利用者がパニックになり、自傷行為に陥った場面などに直面すると、知らず知らずのうちに「支援者の目線」でふるまおうとする自分があることに何度か気づく場面があった。

そのようにして、5日目が過ぎたとき、ふと「利用者になりきろう」、「利用者目線に立とう」としている自分の不思議さに気づいた。そのような「立場」や「目線」が入所者として生活している自分にとって重要であるのかと、自問自答を繰り返すことで、本当に大切なことは「自分であろう」とする気持ちであることに気づいた。するとそれまでの光景が一変し、以前の支援者

の目線で見ている利用者の行動に対して、「何も思わない」私になっていたのである。施設の生活において本当の意味での「入所者」とは、福祉サービスの枠組みでの「利用者」というよりも、そこで暮らす者として自然体ですぐすことであったといえる。そう思ってからの私は、眠たいときは寝たし、勉強したいときは勉強した。自分が暮らしやすいように、「ありのまま」の自分へと変わっていったのである。

(2) 利用者であることへの「ゆらぎ」—ある外出プログラムを通じて—

日にちは遡るが、2日目の夕方の夕食外出プログラムでは、職員と利用者2名と焼肉店に行った。このときはまだ「利用者」になりきろうとする葛藤があったのだが、私は店内に入ると「利用者」としてふるまうことを避けて、あたかも周りの店員や客に対して、私のことを「職員」と思わせるようなふるまいをしていたのである。利用者を席に誘導しているかのような手の仕草や、あたかも職員として周囲に配慮しているように装っていたのである。利用者と同じように行動すること、またはそのように扱われることを私は拒んでいたのである。肉がテーブルに運ばれてきたら真っ先に焼いて、隣に座っている利用者に先に食べてもらえるように可能な限り早く焼くように努めていた。焼肉店においては、私は一切利用者に「なりきる」ことができなかったのである。

時間を戻して、その日の午前11時頃から職員を含め男女10人程度でハイキングに参加した。車は少なく、ほとんど歩行者も通らないため歩きやすいコースであった。往復3時間程度の道のりで、片道に2回ほど休憩を取り、人の少ない公園でゆっくりと昼食を食べた。15時頃には施設に到着し、汗をたくさんかいたので夕食前に入浴を済ませた。ハイキングに参加しているときの私は、利用者になりきろうとする意識はあったものの、不思議と自分に対して違和感なく過ごすことができ、施設から外出したのだが、入所者体験の延長として特に何かを意識することはなかった。

この2つの同じ外出というプログラムにおいて、ハイキングのときは利用

者になりきることに専念できたが、焼肉店では「世間の目」が入るだけで入所者体験自体がなりたない状況を生んでしまったのである。

2. 散りばめられた「差別」や「偏見」

「私は知的に障害を持つ人びとを理解し、偏見などありません。」

入所者体験をした私が、疑問を持つ言葉である。何をもって「理解」したといえ、何をもって「偏見」が無いといえるのか。冒頭に引用した岡本太郎は「己れ」について「くみし易しく、また最も非妥協的なもの。美しいと同時に慄然とするほど醜いものである。」¹⁰⁾としている。また人びとは「己れ」自身と対決することなく、「己れ」自身を避け、「己れ」を滅却した場に美しさがあると勘違いしているともいっている¹¹⁾。

当初、私は利用者に「なりきって」入所者体験することによって、知的障害者の気持ちがよりいっそうわかるようになるだろうと自負していた。しかし、「利用者になりきろう」、「利用者の目線で考えよう」とする行為の奥には、利用者を「ひとりの人」である前に、「知的障害者」であると「ラベリング」している自分がいたのである。心の中で理解したいと思っていた人びとを、実は私自身が無意識の中で「差別」していたのである。

焼肉店での私の「ゆらぎ」は、「世間の目」を直接受けることによって態度や行動が変化したのではなく、「世間の目」が存在する空間に入ったことによって、私が「私」を意識する心によって「ゆさぶられた」のであった。いま、反省的に振り返れば、私は心の底で知的障害者は「恥ずかしい存在」と認識していたために、焼肉店では利用者のようなふるまいを避けて、職員としての立場を取るようになってしまったといえる。つまり、「世間」が「私」を「ゆさぶった」のは、知的障害者に対する私の「偏見」であったといえる。

このエピソードに限らず、私の入所者体験がはじまった時点で、すでに「偏見」は存在していた。例えば入所者体験中の私は初対面の職員であったとしても、あいさつをするといった世間的常識からは自由に、利用者としてふるまおうとすることができたのだが、そこには知的障害者であれば、あいさつ

をしなくても職員からは咎められることはないと認識している自分がいたのである。つまり私の「偏見」とは、知的障害者は職員をはじめ周囲の人に「理解してもらいべきもの」、あるいは「理解するべきもの」として捉えていたといえる。岡本太郎のことばを借りると、入所者体験をする以前の私は「醜い」己れ自身に気づくことなく、「勘違いした」己れ自身を美しいものとしてみていたのであった。

3. 「偽善」な福祉—自己の無力化—

福祉の現場における支援する側、支援される側という関係では「対等な関係」や「共に生きる」のような関係性を持つことは本当に可能なのであろうか。

入所者体験を進めていく上で、「利用者になりきろう」という思いを捨て去り、あくまで「ありのまま」の姿で、施設で暮らすことを決断した。そのように気持ちを切り替えてすごすことで、利用者に対する私自身の持っていた「知的障害者」であるという「ラベル」が自然と剥がれていったのである。自分の位置取りを模索するなかで、福祉サービスという枠組みを参照項としなくなった私は、周りの利用者をことさらに意識することなく「何も思わなく」なっていった。この私の体験した何も意識していない状態こそが、本当の「対等」や「共に」の関係ではないだろうか。このような関係は「ありのまま」の姿ですごしていた自分に疑問を持ち、この体験を整理していく過程で浮き彫りになっていった。

福祉の現場では、「対等」や「共に」を概念化している時点で、すでに利用者を対象化してしまい、「対等」「共に」あろうとする「職員像」や「自己」をつくりあげてしまうのである。そのように意識して関係性の構築を図ることが多い支援の場においては、「対等な関係」「共に生きる」という想いはあったとしても、そのような関係は存在しないのである。

もし、現在の私が支援する側の立場だとしても、知的障害を持つ人びとに対して差別することなく、対等な関係を持つことはできないだろう。自分の

中に存在した「醜い」己れ自身は消え去ることはないと思う。しかし、私は自分が非常に傲慢な人間であることに気づくことができたのである。自分の弱さを知ること、正直に支援できるのではないかと感じている。支援するとは非常に「あったかい行為」ではあるが、一方では「とても寂しい行為」なのである。この矛盾する支援関係の存在を自覚し、なおかつ支援することに対して自問自答を繰り返すことが大切なのではないだろうか。

Ⅳ. 「施設」をよみとくー構造からの視点ー

1. 施設暮らし

(1) 語られない施設

施設の生活フロアは「生活の場」と「仕事の場」であり、「利用者」と「職員」という2つの相反する立場が同時に存在している。そのように両極性があるのだが、施設をめぐる言説では、利用者の暮らす「生活の場」のみが語られることが多いのではないだろうか。

施設の住環境は全体的に見渡しが良く、死角がない構造になっており、安全の配慮や掃除等を効率良くする為に、できる限り何も置かれていない空間が作られている。そのため全体的に殺風景な感じがして、生活感がみえてこない。施設の生活にはどこか「人間臭さ」が欠けているのである。

やはり、施設の構造は職員側の目線で設定されている。どれだけ施設が利用者の「生活の場」であるといったとしても、施設的环境は職員の「支援」のために考えられているのである。実は、ユニット型のようなハード面の改善がなされていたとしても、それは利用者の「生活の質」を向上させるのではなく、職員の「支援の質」を向上させることにメリットがあるのだ。そのため一般的にいわれている「生活しやすい施設」とは、利用者にとって生活しやすいというよりも、職員が「支援しやすい場」という構造の中に組み込まれた「生活のしやすさ」なのである。

(2) おもてなしの生活

施設生活で苦痛だったのは、行動の前後にある1時間程度の「空き時間」であった。合計すれば1日に約7時間あり、大半を共同スペースで過ごし、利用者とテレビを見ていた。社会福祉士の実習で入所施設を経験していたので、このような時間があることはわかってはいたし、この時間をのりきることこそが入所者体験の醍醐味ではないかとも考えていた。あえてそのようにすごした部分もあるが、実際にやることがなかったのである。

しかし、施設生活をおくっていくことで、不思議なことにそのような「空き時間」が苦痛ではなくなってきたのである。それは施設の受動的な生活スタイルが、次の行動を考えないようにしたためである。そのため逆に頭を使って考える作業の時間が長く感じられた。冒頭のドストエフスキーの言葉にもあるように、人間は習慣化された日常に対して、ひどく素直なのである。そのため11日間という体験期間の中で、私は施設の生活にどっぷり馴染んでいったのであった。

施設生活とは、栄養管理された食事を摂り、規則正しい生活をする事(実際、私自身の体調も非常に良くなった)によって、健康的であり、とてもいい「おもてなし」を受ける生活である。しかし、それは自発的に行動する機会を奪い、用意された時間に当てはまっていく「考えなくてもいい」生活でもあったのだ。知的障害などの本人側に何等かの制約があるためにそのような生活になるというよりも、利用者からすれば施設の固定的な日課の中で「期待できない」、「要求できない」といった施設という構造自体がもたらす生活の姿であるといえる。もし、施設やあるいは職員が毎日利用者のさまざまな期待や要求に臨機応変に対応できているのであれば、利用者はもっと何らかの欲求を吐き出しているのではないだろうか。何かを求めても叶えることができない、そのため利用者は日に日に「考えない生活」に浸っていくのである。

2. 利用者を取り巻く人間関係の希薄さ

(1) 利用者同士のコミュニケーション—10日目の実習体験を通して—

<事例>10日目の18時からの入浴の際に、私は脱衣所で利用者の脱衣や、入浴後に体を拭く介助をした。Sさんの体や頭を丁寧に拭き、服を渡して着てもらふ介助をおこなった。するとその後に、Sさんは「パンツはく」と言っ
て服を全部脱ぎ、私に投げかけてくることがあった。私は服を着てもらおうと、投げつけられた服をSさんに返すが、また投げかけてくることを繰り返した。そのようなやりとりをして困っているところへ職員が来て、服を着るように促すとSさんは抵抗なく服を着た。その現場にいた職員の話では、Sさんのそうした行動は実習生や新しい職員に対して、よくすることがあるとのことであった。

Sさんにとって利用者もしくは職員以外の「期待できない存在」だった私が、入浴介助という援助関係を持ったことで、自分の要求を聞いてもらえ「期待できる存在」として認識できたのである。私が部分的に支援に関わったことで、Sさんの秘めていた要求が出てきたと考えられる。施設の生活には利用者同士の交流を自然に生み出す要素が組み込まれていないため、集団で生活しているが実際は利用者の相互の関係が持ちにくい環境なのである。そのため、Sさんと私は同じ生活フロアですごしていたが、利用者としての2人の関係性は非常に薄く、「支援」的な要素がない状態では、特別な関係を生み出すことはなかったのである。

(2) 「支援」と「会話」

生活フロアでの仕事中の職員はどこか表情が硬く感じられ、利用者との会話を楽しんでいる様子は少なく、そつなく業務をこなしている雰囲気であった。また私と職員との会話はほとんどなく、「大西さん～してください」という声かけが中心になっていた。

6日目に喫茶外出に行った際に、私はファミレスに忘れ物をした。施設に

帰ってきてから、忘れ物に気づき同伴した職員が取りに戻るがあった。その際に私は迷惑をかけたことを謝ると、「私が確認していなかったので、私の責任です。」とその職員は言った。同伴した職員のYさんに、なぜこのようなことがおこったのか尋ねた。

【聞き取り抜粋（2）：Yさん】

[]：筆者の判断により補充 以下同じ

Yさん：「ファミレスではちょっと気がぬけてた。[大西君と]話したことによって[支援員としての]自分がくずれてしまった。(中略)大西君と[会話をすることで]少しではあるが日常の関係づくりに近いものが生まれてたんとちゃうかな。」

2人は「会話」という関係によって、職員と利用者という立場から一旦離れ「健常者」同士の世界に入ってしまったのである。またYさんは支援員というよりも、より普段の日常に近い自分になっていたのではないだろうか。そうしたお互いの役割から離れた「会話」が支援関係をくずしてしまうのなら、「会話」をすることは職員と利用者という関係ではないことになってしまう。支援する側、支援される側の関係においては、実はお互いの役割をはずした、対等であってパーソナルな関係性は持ちにくいのである。

(3)「支援する」という意識

私と職員とのお互いの役割の中での「会話」では、パーソナルな関係は生まれなかったが、休憩中などにリラックスして話したときは、非常にフレンドリーであり、パーソナルな内容の話をした。つまり、職員には「工作中」と「休憩中」にギャップがあったのである。生活フロアで仕事をしている職員は、やはりどこかで仕事に対する「ON」と「OFF」の区別をつけているため、利用者として接していた私は、職員に対して疎遠であると感じたのではないだろうか。職員の語りの中では、次のようなものがあった。

【聞き取り抜粋（3）：Yさん・Nさん・Aさん】

Yさん：「仕事中は気を張っているな。命を預かっているので気を抜くことはできない。仕事とキャラを分けているかな。仕事中は常に支援員として意識している。」

Nさん：「職員や利用者に対してONとOFFはつけているかな。自分の中のONとOFFはつけてないな。特別に意識してないけど、どちらかというところメリハリをつけようとしているかな。仕事の中でのONとOFFではなくて、生活でのONとOFFに近いかな。」

Aさん：「できるだけ怖い顔はしないで、笑顔でいるようにしているかな。常に自分の状態はどうなんかなと考えている。」

やはり職員はどこかに「ON」と「OFF」の区別をつけている。「支援する自分」を客観視することによって、「支援する自分」を意識するのである。それは専門職として大切なことではあるのだが、そのように「支援する自分」をつくり支援しているため、利用者と「ひとりの人」として接することができにくい状況に陥ってしまうのである。つまり、支援するという過剰な意識によって、あるいは専門職としてごくあたり前の意識によって、利用者と職員の人としての関係を硬直させているのである。このことは「生活の場」と「仕事の間」の両極性を持つ施設の抱える構造的な矛盾であるといえる。

3. 施設の構造

(1) 「管理」の仕組み

調査協力先の施設の生活フロアでは、トイレトーパーが設置されておらず、また水道が止められていた。トイレトーパーは、丸ごと1ロールをトイレにつめる利用者があり、全てのトイレが使えないといったことが生じたため、トイレを使える状態に保つためトイレトーパーを設置しないという方針をとった。また1名の利用者が水をたくさん飲む恐れがあり、生命の危機に陥ってしまうために水道が止められていた。

このような、なんらかの「問題行動」によって、施設での生活を「管理」しなくてはならない状況に、職員として「施設の限界」と悩んでいる者も多い。調査先のようなユニット型の施設であったとしても、入所してくる利用者によっては、施設の持つハード面の良さを十分に活かすきれないこともあるのだ。もし仮にそのような利用者がいないとしたら、施設はより快適な生活環境になるといえるのだが、そのような人を追い出すとしたら、それは施設の存在意義を自ら否定することになってしまうのである。

施設では快適な生活空間をつくりだすことが求められると同時に、生命保持や安全管理などの課せられた責任を負うために、施設を「管理」しなくてはならない。そこには「仕方なく」という職員のやりきれなさがあらわれてくる。つまり、施設の管理とは「個人の自由」と「集団生活」と「施設の責任」という3つの要素を混ぜ合わせ、妥協したところに設定されているのである。そのことが施設の「管理」の空間をつくりだして行くのだといえる。

(2) 見えない「管理」の構造—利用者の「ステキな姿」—

施設の「考えない生活」は、施設や職員側の制限によってつくられていくことは前に述べた。そのような生活には、施設での「利用者としてのあるべき姿」をつくりあげていく構造があったのである。

1960年代の精神病院を描いた映画『カッコーの巣の上で』には私が表現している利用者像が描かれている。主人公は病院のグループワーク療法に参加した際に「ワールドシリーズを見よう」と言い出すが、その発言は周りからすれば「異常」とであると見られる場面がある。婦長は「病院には規則があり、その流れを変えることはできない」と反論する。他の患者も規則を変えることに対して前向きになれないでいた。主人公は「国民的行事のワールドシリーズを皆で楽しもう」といたってまともなことを主張しているのだが、そこには妙な秩序があるために、それに反する者には「異常者」としてのまなざしが注がれるのであった。これこそがフーコーがいつている、自発的に服従する「主体」の姿であって、患者は病院の中に存在する「患者としてあらな

なければならない姿」という見えない権力に対して自発的服従を強いられているのである¹²⁾。

入所者体験が後半に進むにつれて、職員の前では見せないような利用者の行動があらわになり始めた。それは普段は職員がいることによって防がれている行動でもあったのである。施設の生活において自然体ですごくようになった私の分岐点は、私自身のみならず利用者と私との関係の分岐点でもあったのだ。すなわち、私自身がとらわれていた施設の「利用者像」からの解放は、実は利用者にとっても私を仲間として招き入れる「仲間意識」の扉を開く解放（開放）だったのである。そこで織り成される例えば利用者同士の乱暴な行為に直面した私は、利用者の私に対する「仲間意識」を裏切ることはできなかったので、利用者の「ありのまま」の姿を受け入れた。なぜならば、そのような行動は私の目からすれば、利用者にとって束の間の「自由」であると感じられたし、なんといっても「人間らしさ」がでていたからである。

施設では職員のその都度の指示の有無に関わらず、職員という存在自体が利用者の行動パターンを「コントロール」し「制御」してしまっているのである。そのために利用者は施設生活の中で行動パターンを変えているといえる。半世紀を過ぎた今でも、『カッコーの巣の上で』で描かれている施設（病院）というある一定の妙な秩序の空間の中で、形成される構造はなくなっているのではないのである。そのような職員と利用者という支援関係によって、知らず知らずのうちに施設での「利用者としてのあるべき姿」をつくりあげてしまうのである。

そのため、施設の生活の中には「人間らしさ」というものが欠けていると思えてくる。個々の職員のパーソナリティや仕事に取り組む姿勢がどのようなものであるのかということも重要だが、それ以上に「施設」における「職員の存在」が、利用者の「人間らしさ」を奪っていき、利用者の行動を一定の規準に規定してしまうのである。この規準は、「集団生活を円滑に進めることができる職員側の許容範囲」に規定される。そのような規準からはみ出た利用者は、「問題行動」としてのまなごしを向けられ、なんらかの策を考えて

施設の規準に収まってもらわないと困るのである。施設が「てんやわんや」では仕事にならない。そのような、見えない「管理」の構造が施設という空間には存在するのである。

(3) 職員も「規格」化される

施設は外部との接触が少なく、関係性が限定されているため、人間関係が硬直化していく可能性がある。そのような対人関係の「マンネリ」化が、いわゆる施設の閉鎖的な生活をつくりだしていくといえる。利用者にとっては、唯一の外部との接触となることが多い職員の「仕事の場」での人間関係とは、一体どのようなものなのか。利用者の生活をサポートする側の職員同士の関係性に焦点を当てることは重要ではないだろうか。職員に他の職員の目線や存在をどのように意識しているのかについては、次のようなものがあった。

【聞き取り抜粋(4) : Aさん、Yさん】

Aさん : 「ぼくは他の職員に〔自分の存在を〕感じられる(意識される)ようにしている。一人で仕事をするとダメになるから。相手(他の職員)に自分を感じられるような声かけをしている。自分の中で〔意識して〕プレッシャーをかけている。」

Yさん : 「常に〔周りの職員に〕見られている印象があって、やはり〔周りの職員に〕気を使うな。〔周りの職員に〕見られているとずっと意識しているし、逆に〔他の職員を〕僕からも見ている。」

職員は他の職員を意識して支援することで、「支援する自分」を客観的に意識するのである。また他の職員に対しても「支援」を意識させるために、自分の存在が「意識」の的となるように意識させる。そのようにして施設での支援の規準を乱さないように、継続させていこうとするのである。この規準は「ある一定の集団生活を円滑に進め、また施設での支援がぶれないように仕事の場を保っていくこと」である。職員同士が意識する相互の「まなざし」が集合化することで、このような施設の規準が形成され、また職員をある一

定の方向に「規格」化させるのである。そのような施設の規準を保つことのできる職員が「規格」化され、暗黙の理想とされる「支援員像」がつくりあげられる。これはフォーコーの権力構造において、「権力は下部からくる。(中略) 社会の基盤にある家族や会社、サークルなどの小集団のなかで生みだされる力の関係が、全体を統括する権力関係の基礎となる。」¹³⁾との指摘と重なる。そのような「支援員像」が施設の規準を縛り上げる基礎となっていくのである。

そうした施設の職員の日常に、利用者体験をしている私の存在は、ある種の緊張感をもたらし、日常に少しの亀裂をもたらしたようである。私の存在をどのように感じていたかについての職員の語りでは、次のようなものがあった。

【聞き取り抜粋(5)：Lさん・Gさん・Aさん】

Lさん：「緊張感を持って仕事できる。普段の業務でも緊張感を持ってやらんと行かんけど、慣れてしまってるんやろな。」

Gさん：「些細な自分のふるまいや、利用者に対する支援をみられているのではないかと常に意識した状態ですごしていた。言葉がけや、利用者に対する声かけを丁寧にしてしまうことを意識したかな。常に外出している感じやったな。」

Aさん：「仕事中は常に大西君に見られているという意識があって、(中略) 職員一人になると弱い者になってしまう。誰かの目って必要なかなと思った。」

聞き取りの内容をふまえると、職員は私の存在を「世間の目」として捉え、その目線を意識しながら仕事をしていたといえる。これは焼肉店で起こった私の「世間の目」の捉え方と共通する部分があるのではないだろうか。職員が意識した「世間の目」は、「私」という部外者を通して職員自身の中にも存在しているものであり、それが職員の心の「ゆさぶり」を生み出したといえる。

私が「世間の目」を連れてくることによって、職員は「支援する自分」を見つめなおすのである。冒頭のドストエフスキーの言葉にもあるように、人と人との関係において自然と生まれていく「慣れ」というものを、職員は肌で感じていたのである。つまり、私の意思とは無関係に私の存在自体が、施設での硬直化した関係性の中に「世間の目」をもちこみ、職員が「自己」を見つめなおし、そうして施設の中で構成されるさまざまな関係性の相対化を図ることを迫ったのであった。

V. 結語

今回の入所者体験は正直に言うところ「行けばわかるさ」というコンセプトで挑んだ。筆者が参与観察という特殊な調査方法に対して、十分な知識を持っているわけではなかった。しかし、いま、振り返れば筆者のような「平凡な学生」という知識を持っていないことを武器とし、第三者の目線で施設に飛び込んでいくことに意義があったと感じている。

本稿を読み進めていく上で読み手側が先入観を持つことを避けるために、質的調査の特徴でもある施設の実態を示すための細かい記録や写真、施設の見取り図などを載せなかったのである。それは今回の入所者体験で筆者自身が先入観と闘い続けてきたためである。本稿の読者を入所者体験に導くことを狙いとし、筆者の個人的な体験から、「施設」が持つある種の普遍的な性格を描くために、あえて読み手のイメージを掻き立てるような表現を用いることを意識した。

当初の調査目的は、「私自身が利用者の立場になって生活することで、施設で暮らす利用者の気持ちを『理解する』こと」であった。福祉を学び始めて「障害があっても楽しい人生を送ることができる」と希望を持っていたが、入所施設での社会福祉士の実習後に「生かされるのが福祉なのか」と疑問を抱いたことが、今回の入所者体験を望んだ事の発端であった。その「理解」に基づいて何かを発言できればと考えていたのだが、結果は別の関心へと向

かい「自己の無力化」「構造の矛盾」「慣れ」といったことをキーワードにひきつけられながら、体験後にひたすら記録を整理し、文献を読み漁る自分がいた。また思いがけず、新聞にも取り上げてもらった¹⁴⁾。

本稿の執筆を通じて、入所者の体験をすることにより筆者自身が体験以前まで気づいていなかった「障害」へのネガティブな捉え方が浮き彫りになった。やはりこのような「障害者」に対する無自覚的な差別的な感情というのは、人びとの日常のいたるところに潜んでいると考えられるだろう。今回はその「障害者」を意識することは、筆者の外部にあるのではなく、「世間」を対象化した自らの「障害」に対する意識が内在化されたものであった。その事実を「良い」「悪い」のような二元論で片付けるのではなく、その差別的な感情の原因を探っていく過程を見つめなおし、「障害者」を支援していく側の、現実的なありようを語る事が重要ではないだろうか。

施設生活は規則正しく健康的な生活なのだが、「おもてなし」を受ける生活であるため、そこでは自主性を持ちにくい環境なのである。また、施設やあるいは職員が利用者の生活を「管理」しなくてはならないことが、利用者の人間らしい生活を奪ってってしまう。やはり施設は利用者にとっての「生活の場」よりも、職員にとっての「仕事の場」としての機能が大きいのである。これは施設が存在する限り、抱え続ける矛盾となるだろう。人と人とのつながりにおいて「慣れ」が生まれ「硬直化」していく。そのような生身の人間が織り成す弱い部分にささやかながらも「抵抗」を試み続けることが、施設の本当の「理想」の姿ではないだろうか。

謝辞 本稿は、調査協力先である施設の方々の協力があってこそ可能になった。最後になるが、貴重な体験をさせて頂いたことに、謝意を表したい。

注

- 1) 岡本太郎著『原色の呪文』文藝春秋, 1968年, 69ページ。
- 2) ドストエフスキー(工藤精一郎訳)『死の家の記録』新潮社, 1973年, 17ページ。
- 3) 武川正吾『地域福祉の主流化』法律文化社, 2006年。
- 4) ジム・マンセル/ケント・エリクソン著(中園康夫/末光茂訳)『脱施設化と地域生活』相川書房, 2000年。
- 5) 厚生労働省『社会保障審議会障害者部会 第33回資料』2008年6月9日。
- 6) 「知的障害者の家族700人参加 福祉施策のあり方探る」2010年9月9日付『毎日新聞(神戸版)』
- 7) データの収集と分析を同時並行的に行い, 質問用紙が無いことや, 質問の内容が調査の段階で変化して進められる調査方法。佐藤郁哉『ワールドマップ フィールドワーク 増刊版 書を持って街へ出よう』1992年, 191~198ページ。を参照のこと。
- 8) フィールドワークの「対象者」を示す言葉。前出, 佐藤, 170~176ページを参照のこと。
- 9) 好井裕明/山田富秋編『実践のフィールドワーク』せりか書房, 2002年。
- 10) 前出, 岡本, 70ページ。
- 11) 前出, 岡本, 69ページ。
- 12) 桜井哲夫著『現代思想の冒険者たち 第26巻 フーコー—知と権力』講談社, 1996年, 265ページ。
- 13) 前出, 桜井, 260ページ。
- 14) 「利用者との生活で見えたこと」2010年11月13日付け『産経新聞』